



作歌故實

乾

~ 4
8166
1

齊
藏
二百

作歌故實 28



八4
8166
1



作歌故實卷之一

目録

- ① 一作歌詠歌
- ② 歌をつくる
- ③ くちつ歌
- ④ 詞人哥人歌讀
- ⑤ 歌枕
- ⑥ 本居氏の評
- ⑦ 萬葉家
- ⑧ 歌名をあらわす

< 2012-70 >

九 草子物語外題

十 雜題の季をよみいろ

十一 近世の人形歌をとよみ

十二 假名はづのひ

十三 定家卿の假名つかひ

十四 古學道統

十五 和歌披講

十六 百首歌

十七 懷紙の始

たごうかみ ふところのみ

十六 懷帛歌書様

十五 真名の懷紙

十四 一首懷帛

書切らぬ字 ウ四

十六 賀懷紙の字 ウ五

十六 墨續 ウ六

十 歌の關字 ウ六

十六 二首懷帛

十六 三首懷紙

十六 五首懷紙

日月君の字 ウ五

省冠 ウ五

奥の明間 ウ六

④七首懐帛

⑤十首懐紙

⑥十三首十五首廿首卅首五十首百首

千首等の懐帛

⑦懐紙の料紙

⑧懐帛の端作

春日 標六

題割書 標六

割位署 標七

⑨同性の亭主の性を書す 標四十七

同詠 標六

法樂 標六

凡人懐紙 標四十八

僧の懐帛 標四十八

致仕の人の懐帛 標四十九

臨時懐紙 標五

二首以上懐紙 標五

季書 標五十一

端作文字 標五十二

端作闕字 標五十三

二字題三字題 標五十四

經文端作 標五十五

姓の細書や太書 標四十八

児懐紙 標四十九

遊覧の懐帛 標五十

一首懐紙 標五十一

季同 標五十二

端作書初 標五十三

倭和歌哥詞等の字 標五十四

未公文勅公文 標五十五

名乘 標五十六

とと草 標五十七

當官前官

五十六

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 宗神紀, 詠歌, and 枕草子.]

作歌故實卷之一

一作歌詠歌

よよひしを日本紀万葉なと作歌と書たり又
萬葉詠天詠月なとあは中昔の書詠歌とあ
るもむらさきあは京極黄門の書各詠歌大概
よよひつけたちひき宗神紀十年の詠ウタフ靈異記中
詠宇多比豆の巻詠有太比なよよひとらひ
宇多と發聲の名よむる引聲の名なり神武紀
謡此云宇多預游雄略紀四年の歌賦ウタヨミ枕草子
むとくわもの段よよみしをねらせさ

んえその卯日記中の歌の字諱の字をウタヨミと訓たりと
挙るに違なり。宇多ハ声を発するの古事記雄略の段に其猪怒
而宇多岐依来故天皇畏其宇多岐登坐榛上ホリスとあり
も猪の声を揚る依来とありて宇多岐ハ声揚の略なり
俗言ハウナルといふ声揚の略なり多と奈ハ音
のあり本居氏長ハ宇多岐を日本紀ハ宇陀積ウタケと書たり
ば陀を濁り岐を清つといひて日本紀の假名ハ清
濁混用と證アケレし。かゝりてはつて發声引声ともアイウ
エオの語ハ中国の自然オノツカありてつとを母音とて預年ヨムと
呼なり。年と夫の濁音ハ通例なり声を引をいふ古事

記上卷稲羽の菟の鰐を欺る余ハ走下讀度す。讀度
来なり。あまおをねまひつふとなど。怒立てよ
ゆ急なり。書籍を讀まする呼の通音ありたり。

二歌をほくふ

くさむよむといふるらんなり。万葉の作歌の字を
賀茂高の万葉考高ヨメルウタと訓たり。夫木抄雜
部詞書高引たり。ほくふとことよる。顯宗紀前詞
人ウタツクル七ト云。継躰紀七の条ハ斐然之藻ウタツクルヤヒ云。
たつらんまの外の外紀中ハ作歌の字ハウタツクルとよめ
る所おわり。空穂藤魚の君よとつらまあそびし

二条天皇后宮大貳
の歌ハ
くさむよむ
このくさむよむ
斧のゆき
えんを
いふもエの
ほくふよせ
らなり

けしん云同吟あけのまに歌はなりなまをいつよみあけて
きんよあをせくりりるるふんたもふ云枕草子
春曙抄 三の巻 名はとくふ歌よ奇よもあふはく歌なり云
ともあり古る記も作御歌とあるを中居氏の傳
あるミウタヨミシタマフとよめを

三 くちつ歌

くちつとくちつはさみなるとかおや一海よふんた
なとりつとくちつはさみ雄略紀四年の条に口號クチツウタ云
継七年 口號クチツウタ云育明紀七年の条に口號クチツウタ云
なとあり口號の義ハ嚴滄浪詩話に云く。口唱の字ハ

洛陽伽藍記にゆる共ハ西蕃の語をかりて云ぬ云後
合戦の書に京童の口歌といふ今のハヤリ謡ハナ謡な
との類にておや一と云

四 詞人歌人歌讀

顯宗紀前紀に詞人ウタツクルヒトとあり詞人の字は舊唐
書張九齡の傳にも云ゆまの空穂歲切きの中よけを
みことむりなるうりけるひのよき歌よみなり云源
氏也かつふふの歌よみ又と云あふと云よ
の中よみ云云。枕草子春曙抄七の巻 むらけけるるりの段に
女よみ云云。歌よみと云。歌よみと云。歌よみと云。歌よみと云。

大和物語^{上巻初段}のまの段 まのちかおのちかのまのちか よみぬのまのちか
栄花物語初ふよ よみぬのまのちか よみぬのまのちか よみぬのまのちか
集よ よみぬのまのちか よみぬのまのちか よみぬのまのちか よみぬのまのちか
の名ある女房^ま宝物集^七のま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま
万葉集ヨリ以来ノ集ニ入ル歌詠トモ其數ヲシラズ^三林
葉集^上のま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま
たよ よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま
奉 よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま
候 よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま
舊本今昔物語明月記その外に記録の歌人とも。

歌讀も

五歌枕

源氏物語のま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま
あり よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま
はき よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま
香 よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま
能 よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま
一 よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま
か よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま
を よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま よみぬのま
又 奥義抄上

秀歌傳の条は、ぬき入られたる歌枕をおき、はたきお
 ともを、その字あつたを、とある、序の縁語枕詞をど
 れと、すゆ門人、藤原資重り、説き、歌枕といふ名、そのと
 志、せふ、あ、かき、つ、ど、は、つ、歌詞の、任、辨、書、の、名、な、る、つ
 其、今、傳、る、能、因、歌、枕、といふ、もの、も、詞、の、注、子、て、名、あ、る、
 といふ、い、ふ、れ、と、その、高、修、傳、の、わ、れ、と、い、ひ、も
 けつ、信、一、公、任、卿、の、歌、枕、能、因、の、歌、ま、つ、と、い、ふ、古、き、
 といふ、た、る、よ、る、心、の、事、よ、か、き、ぬ、を、も、と、い、ふ、つ、源、氏、の
 注、釋、の、説、を、つ、け、つ、一、歌、枕、は、歌、詞、の、こ、心、は、た、る
 の、よ、し、と、い、ふ、説、を、つ、づ、い、ふ、れ、る、説、と、い、ふ、一、能、因、が

諸國歌枕三卷あり、坤之儀と号し、顯昭の拾遺抄注に
 あり

六、本居氏の評

本居氏宣は、歌、口、あ、る、は、と、と、一、宛、い、ふ、事、を、本、の
 弘、文、生、の、口、に、せ、り、と、は、圓、珠、菴、河、岡、保、契、沖、縣、居、翁、高
 本居氏宣の、千、卷、万、卷、の、書、よ、み、あ、き、つ、め、て、イニシイマ
 冠、統、ヒイデ、スクリヒト、たる、大家、たる、歌、を、わ、か、け、な、く、る、一、い、ふ、ん、か
 一、あ、つ、と、い、ふ、の、と、き、こ、は、な、り、そ、は、い、と、わ、い、し、き、ん、よ
 里、い、れ、な、る、よ、と、い、ひ、た、つ、る、な、め、を、お、よ、ひ、う、い、し、わ、い、
 形、家、を、不、鈴、屋、家、集、古、神、通、勝、哉、と、い、ふ、あ、る、も

学志の志を成り遂げる者もなつて人よきこと
このたよりの庄園にお居氏とて本邦の歌先生と
を評させしうんもきつひのなるわさことをうりい出さ

七萬葉家

世の万葉家の先生と自称人おほりその先生万葉
を講し後校舎をせぬさうなり一わさもよみせ
ほくとお城ももこつて志さうかほなるかゆる
ふゆあまのわん強論徳よらんごうはしりいあ
つとおのいあをされひらりあまね じりりさうきさう
歌をや

八歌名歌のそあうなる

儒者の詩名をよせせよあうなれむとて我をう傳学志
と歌学志をよみなとてわんやまんをう成りか
らう詩をよふ才とらうあたるあう歌の学のらうよ
ようぬとてぬまは白髪の老翁もあ女房よあひさ
あそりおほりりさきてものあなごらうう歌き人き
歌をよまよみ流る世も志しぬんくわいのらえ
学志の然韓退之柳子厚の詩の類も別味あり

九草子物語外題

東野州聞書子常免院来臨ありヤされりお哥双紙

をハ外題をヨリハ例式のヨリハ押ナリ物語ハ中ニ押
ヨリハ中ニ押マシテ可知^ラ之^云云。蓋^ハ囊抄^ハ卷^ハ双紙^ハ銘^ハ中ニ書
アリ端ニ書アリ如何勅撰等ノ歌草子ハ皆端ニ書大和物
語伊勢物語等惣テ物語ト云ハ必中ニ書也ト是冷泉家
之記也。其外無沙汰^キ歟。又於^テ聖教^ニ天台宗山門ハ多分中ニ書
キ寺門ハ必^ハ籍^ハニ書クト云。按^テ菅見野水抄^ハ卷^ハ秋原隨筆
源氏^ハかき^ハ源氏^ハかき^ハ源氏^ハかき^ハ源氏^ハかき
中ニおけり
ん

火打^ハ源氏^ハかき^ハ源氏^ハかき
源氏^ハかき^ハ源氏^ハかき
中ニおけり
ん

新古今^ハ別

紫式部^ハ雁部

かき^ハ雁部

同

雅有^ハ雑^ハ十四

續世^ハ雑^ハ十四

宇治拾遺^ハ九殿

孝

徳紀^ハ二年

かき^ハ西

書

外題

あり

十 雜題の季をよみい

徹書記物語の雜の題をよみいまる季をよみい
ほつる季のよまれむるをよみいむるをよみい
季をよみい當季のよみい

十一 近世の人の歌をよみい

近世の人の歌をよみい
近世のよみい
近世のよみい
近世のよみい
近世のよみい
近世のよみい
近世のよみい
近世のよみい
近世のよみい
近世のよみい

近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい

よみい近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい
近世の人の歌をよみい

十二 假名ばつ

假名ばつ
假名ばつ
假名ばつ
假名ばつ
假名ばつ
假名ばつ
假名ばつ
假名ばつ
假名ばつ
假名ばつ

田原春の校本を板はきりてこれこそ色いけりぬとあり

海名つらひの極き時代よりさかりあたるをんはは
中々あきまあやと終と何りその古事記日本紀の海
名と延喜天曆の代の海名とを比べると万葉も奈良
の類とさうその終と古のかわさるをさよおひ終り
この國も周易尚書わく後の書と終助字の極たが
るるがごとくさき海字はうひの馬を宇万梅を宇米
諾を宇倍魚を宇乎薰を加乎流なと書きたるひなる
延喜天曆の比の俗馬を牟麻梅を牟米諾を牟倍
魚を伊乎薰を加保流なと書きたるは出使馬出東遊
風俗古中字鏡和名抄新撰万葉日本紀竟宴歌年中行

事秘抄或ハ貫之通凡俗理初成の自草といふもの傳
たりぬみれこの定なりと終音の通つより一變せし
まて後の宅家海名遣といふひの書のことひあわ
まは終と三代集のさるのちを記紀万葉の海名と
あそせしむる海名といふはあやするはあは古詞の
歌古辭の久きを必死記万葉終何を用べし三代集よ
る海の終と古海名を用は宅家海名遣の終といふ
はさし終とあやまると古はあやするとのけちをのそ
ちう終集余をやくよりおとるせしとあはねの終と
用る人なり出使石川雅望の雅言集覽この心を

あつて具眼の志ありて

十三 定家卿の倭名ほろひ

世に定家卿の倭名遺事ありてありて今假名をいふ
古倭名ありてをいひ出し復なりは倭名をいふ大炊
助親行り拾遺愚草の法をいふと考志をせしを孫
のり阿の定家卿の遺事ありていふ名に相合しなり
四聲等輕重なりていふ古書に略記ありて
ふゆり出しなりていふ名に相合しなり
るる師承の倭名大炊親行りせしめたるなり
とぞとやんとていふ師承ありて用ひし倭名遺事

おのつゝいふ定家卿の倭名ありて一書にきりて
多しなりていふ名に相合しなり必倭名に定家の倭名
をいふときありていふ名に相合しなり

十四 古學道統

古學の萬葉ありていふ名に相合しなり契沖法師荷
田宗祿東麻呂を祖とていふ名に相合しなり顯昭仙足成信など
の眼をいひていふ名に相合しなり下河邊長海に戸部
戸田茂隆などいふ名に相合しなり契沖法師をいふ名に
相合しなり荷田宗祿を祖とていふ名に相合しなり
あつていふ名に相合しなり契沖の書なりとていふ

を飛ぶのれけんも知らずの加城の真の宿禰の門人なる
 もあらず契沖の流を押しふる先らぬ賀茂の門人
 お居るの中は本居宣長傑出する天下一をたびり
 福の海を海考あつて江戸の鳴るは古きを加茂の
 のまゝなりて無き中興の祖師といふも余の自
 海春よりそをくけりぬか茂の孫弟子たるを
 てねのそおとくも不才拙も忘れしむる志みは今
 試み道統乃系苗を法よりて後学も志しむる

顯昭 法稿 袖中抄撰者 左京大夫顯輔猶子

仙覺 權律師 文永年中之人

成俊 權少僧都 文和年中人

下河邊長流 大和宇田人 称小崎彦六 歌学

戸田茂睡 江戸人 号梨本 歌学

僧契冲 撰津尼崎人 号圓珠菴 歌学 佛学

安藤為章 水戸藩士 号年山 歌学 史学

今井似閑 京都人 号見子 歌学

海北若冲 浪華人 号岑柏 歌学

野田忠肅 撰津人 号津 歌学

荷田東磨 洛南稻荷祠官 称羽倉齋宮 神学 律令歌学

荷田在滿

祢東之進
律令 故實 歌学

御風

祢東藏
歌学

堂美子

歌学

賀茂真潤

遠江人号縣居世称岡部衛士
神学 史学 律令 故實 歌学

小野古道

歌学

日下部高豐

小金人俗称今條定右衛門

加藤宇万伎

号静舍
歌学

伊能魚彦

下總佐原人 称茂左衛門景良
歌学 画家

村田春郷

歌学

橋千蔭

号芳豆園
歌学 書家 画家

村田春海

号織錦齋 俗称平四郎
歌学 律令 詩人

建綾足

号凉袋 仙臺人
歌学 画家 俳諧

橋常樹

歌学

高橋秀倉

律令

本居宣長

号鈴屋
歌学 神学 韻学

荒木田久

号五十槻園
神学 歌学

栗田土滿

遠江人
神学 歌学

内山真龍 遠江人 歌学

よの子 歌人

み子 歌人

あつ子 歌人

田中道磨 歌学

横井千秋 尾州藩士 歌学

服部中庸 伊勢松坂奥方 神学

上田百樹 京都人 神学 史学

小篠敏 石見濱田藩士 歌学

片岡芳香 江戸人 歌人

馬場長暎 江戸人 歌人

井上務廉 江戸人 歌人 書家

山本正臣 歌人 故實

清原雄風 歌学 儒学

正木千幹 歌学

上田秋成 浪華人号与齋 歌学

村田春道 春郷春海父 賀茂翁友 俗称次兵衛 歌学

橋枝直 千蔭父 賀茂翁友 歌学 史学

富士谷成章 京都 歌学

三島自寛 始名景雄 歌人

伴蒿蹊 歌学

小澤蘆庵 歌人 | 小川萍流 歌人

大村光枝 俗称彦太郎 京都人 歌人

泉真国 哥学 神学

僧海量 近江人 歌人 自称賀茂翁門人

僧立綱 近江人 歌人

賀茂季鷹 歌人 書家

安田躬絃 歌人

⑤ 和歌會披講

和歌の式正會といふと各地下系てはたぬとてなうそ
さあ八代翁草子ハ雲沖抄なりと云えそおほくはたぬ
らうとて学よせしなり 色はぬ人ともはたぬが式正を名づ
け其式まねぶはいとよあうそたををを捕術を学

よみおしあるなりるるる七八首の巻をくつて讀し
りきをわしめりおしせよと云ふの如くは
後形基後なる百首の歌をけたまはしむる四五首
又吹吟しあんとしれけりや四の巻のよみおし
あはれなきもあまのたより地歌をけりといふ
まうせよよまのたよりや當時も云々西上人為圖を
とるるやふれよまのたより愚問賢注にむら
しむるをわしめは地歌をきくよせし事と
て傳るる代々のたよりとてのたより一葉の
あはれなきとぬをたしたる地歌の中へくや

耳底記卷上よるるたをよむる一巻もあつて三十首なり

其の古事 東應あまよむる一巻もあつて三十首なり
用なり是の巻 一巻もあつて三十首なり
たも引古歌字も引く候 一巻もあつて三十首なり
あまのたよきなりよむるこのは傳たりまゝ同
百首なるの歌は二首はけりおしものよもあつて
あまのたよき 細川幽 青巻也 心さつたふりかゝる三首は
つけぬなりはあまのたよき 一巻もあつて三十首なり
八十首の歌をよむる二日三日よむる歌は二
三十首の歌を一巻を十日も十日もよむる

鳥丸光廣
卿の問也

道達院云今地ききまねのひそよみてふの一園のけい
なき歌のくさし總て歌院の葉どてけくわの一重
葉の二三十首をよむべきに歌のさうよむと道達
院仰しれくさしたうきなるとんゆする耳底記中一
葉百首をも柳吉の葉よみそんよんとぬよきこと
光御殿仰しれたりともあり

① 懐紙の始

懐紙の始はかきつる紙ともあはるかみせもしつる置て
懐中の持てぬかたねがさわ名つけしなり空徳蔵用中の
大羽又かきん紙直にともある草をまきまきとせ給

ひしはかきつる紙をかき書て藤毒なまりのふし
よ大羽かきつる紙をかきつる紙のふしよ三よりの草
をとりぬきつる葉をあてしよゆひつる言又藤毒
たも祝紙引よせしかきつるかみよのりかきておぬき
とまねちひぬねの藤氏ぬ梅よぬの葉よわうやこり
あそこの葉のあそこのかきよとりよせ給たのみ
出したるかきしき扱ふ子春曙抄二よきもの殿よあき
しるあそこのかきよむきよきよきよあ物よあ
とまねちひぬねの藤氏ぬ梅よぬの葉よわうやこり
考あねちひぬねの藤氏ぬ梅よぬの葉よわうやこり

山槐記治承四年
二月十日の条より光
雅朝臣持叅表出
懐命八枚上置
同年八月七日の条
予取菓子等入懐
紙云云

きよいよのあひたを言栞衣上ニの姫君の御あり
よあしころのあひたを言栞衣上ニの姫君の御あり
なみそとていふ人ばまは白きまきしなるといふ
形をくくふゆまきまのまきあしぬがきハニあり又三の續
世継白川のころまよとていふ紙をきくたふな
あやくよ好しそ有人とていふけりけり更級日記をのこ
おとせしころかつあふとていふゆみよ公任集より
ふのまよかきくまのまよあふゆめとていふあひのまよ
たのまよ空蟬夕良。榊。港漂。栞衣
代春曙抄八栞衣一の上。おとせしころまよ書しころんて。栞衣

布引の澁ハ法扇たさうかみまそおとせしころんて
次第一の巻元の条 懐中扇置紙落有砂跡テカ放云葦心集八の巻
宮の半者の条 ちあきまようかみまよのまよけあしぬ
ころんてさうりま栞衣上ハはたさうかみ紙き入てさ
らどのかねをささうりま空徳あて言まほめま
たさうこのまはころめよりまよんて と具云なとあり
後撰雜言源氏栞ニたさんかみまよとていふ
通者まよさうまよまよがみカまよカまよカまよカ
なみまよ栞草まよ春曙抄八ゆまよのまよまよまよ
はりみのたさうのまよあひたの懐命の栞衣

散木集六卷 神祇
 之部
 神祇
 散木集六卷
 神祇
 之部
 神祇
 散木集六卷
 神祇
 之部
 神祇

用ゐるはあはれよよき紙たるをりり みちのくに紙ハ
 いりり いりの檀皮
 後をきき いりり 書法なるといふ出 いりり 紙をきき
 如歌乃懐紙を多田義信の南嶺遺稿巻に卯祭
 双紙を引く法和天皇の如歌紙といふもののみちの
 せんをを用く いりり 自信公の記をみてとれ懐紙
 如歌なるより いりり 記 いりり 伊勢氏 いりり 赤鳥 いりり 下入江昌喜が
 くほの いりり 上 いりり 巻 いりり 十の説を奉たれ いりり 義信が
 引用 いりり 余が管見 いりり 袋草子 いりり 卷 いりり

市抄 二の 白河院 堀川院の御代の今々の懐紙の
 北院 守覚法 親王 サキ 右記 サキ 懐紙の事を
 た いりり 違 いりり 素 いりり 異 いりり 通 いりり 紙 いりり 書 いりり 余 いりり 袋 いりり 草 いりり 子 いりり 卷 いりり

六 懐紙歌書様

今の世懐紙の書法は九十九三として初行九字第一
 行十字第二行九字終の行三字といふ通例なり
 是を袋草紙 一の 如歌書様の第一三行三字書之

書之。但近代不必然。故老書墨黑顯然可書之。不可
執乎。跡云八雲御抄二の。哥書様の条。清輔朝臣曰一
首歌八三行三字。墨黑可書。但或三行も言程ヨキ歟
云兼裁雜談。一首懷紙ハ三行三字也云。たつとん
えん九十九云。限りてあるもあつて。明自記十九九
三二水記後ハ土八四なとなと云。好もあつて。必竟
一完せきさねと二水記の終行の四言を字のあやうせ
て三字ななと云。れたまは。いつれも三行三字の或もな
かけを言塵集七の。卷。のふさうなりけやうなりよりなりあ
なとの三字なりも。真名字を記すつらけなり三字なり

を書たり。真名字と云。假名なあぬのの。とつり。又終の三字を

言。依名なあぬと云。好まなりあぬと云。なり。草依な
りもなりあぬと云。或る四言五言なりあぬと云。好まなりあぬと云。字はなり一なり三字
に書するも。例。ねのり。余の見聞なりと云。古人筆跡の墨
字未なりあぬと云。愚記文龜二年正月二十五日の条。も三行三字なり又九十九なり
又未三字事。不加真名なり可為三字なり。依人なり不然。今日
為廣卿なり兵多計なりト書なり云なり。播紳家の所傳授なりなど
り。深なり理なりをなりうなりひなり知なりるなり志なりはなりななりらなりぬなりをなりいなりと
ななりとなりるなりものなりはなりななりらなりさなりるなりいなりどなり古書なりのなり明なり證なりをなり
よりなりとなり説なりをなりるなり。口傳秘授なりななりまなりかなりはなりぬなりのなりあなりらなり

縣居翁 加茂 真淵

のまゝれたる古学の習ナラハレ風なる古学者
とある一のうてもとうむしきわさねるや

⑨ 真名紙懷紙

懷紙を古儀なる書に例あり明月記歌道部類 艶書 可詠

進由とし 二書高檀紙二枚加ラ礼帛レ以テ二枚如ク立文ク晨ニ之ヲ

依テ有ル存ス昔ノ用フ此ノ字ヲ

俱ニ禮加多森計多野所羅

仁ハ酒志良ニ禮如留万津

者ハ依志ニ依志ニ依志ニ世能田

目志登

とありあをハ行書ニ十九九三と四行ニあき女房懷

紙のさあみ端作も位置ナカキなく礼紙ヲをハあねニ立文の

やうよほハあきニあきニあきニ二枚ニあねニ二首ニあねニあきニ

一首のうニあきニあきニあきニあきニあきニあきニあきニあきニ

あきニあきニあきニあきニあきニあきニあきニあきニ

あきニあきニあきニあきニあきニあきニあきニあきニ

⑩ 一首懷紙の圖

兼載雜談ニ一首懷紙ハ三行三字ニ尊俊和哥作法

目錄 東門尊俊の撰として一巻あり天和五年正月の刊本 一首の和歌のちやうのりニあきニ

人又ハ法中ニ筆季ニ同ニ書信ニ部ニの字ニあきニあきニあきニ

法くうにち入る我官位氏名素をきく形を場化よりし
一字にど上と三行、二字にかぶる初行九字二行目を
九字三行目十字と云ふと云ふといふも形よりくも肉
字くはりの被る并みなり位上を衆の官位なりり
書なり法中は官位と名素をうりなりよのつねの人を
友位氏名素ともよきく九行を氏と名素ともいふも
了俊懐帛式 今川了俊和歌懐帛式写本一巻有り奥書
明徳三年八月廿五日三代作者了俊と云々なり 載懐
紙の書様無名実の人を法をたりたみよりみりき
又まなごを一本海ぶる書よみわつひぬねの形この
ころきなりまごをまごをよみんとて文字のまご

はらうしよみらごされぬやうなまごのまごの形しうね
事なりわきまはよみらごのまごの形かまのまごの
情るまごのまごの形かまのまごの形かまのまごの
まごの形かまのまごの形かまのまごの形かまのまごの
又まごの形かまのまごの形かまのまごの形かまのまごの
候るまごの形かまのまごの形かまのまごの形かまのまごの
たる形かまのまごの形かまのまごの形かまのまごの形
師まごの形かまのまごの形かまのまごの形かまのまごの
美葉なごの形かまのまごの形かまのまごの形かまのまごの
人を才学大切なりりる形かまのまごの形かまのまごの

季書懷帑之圖

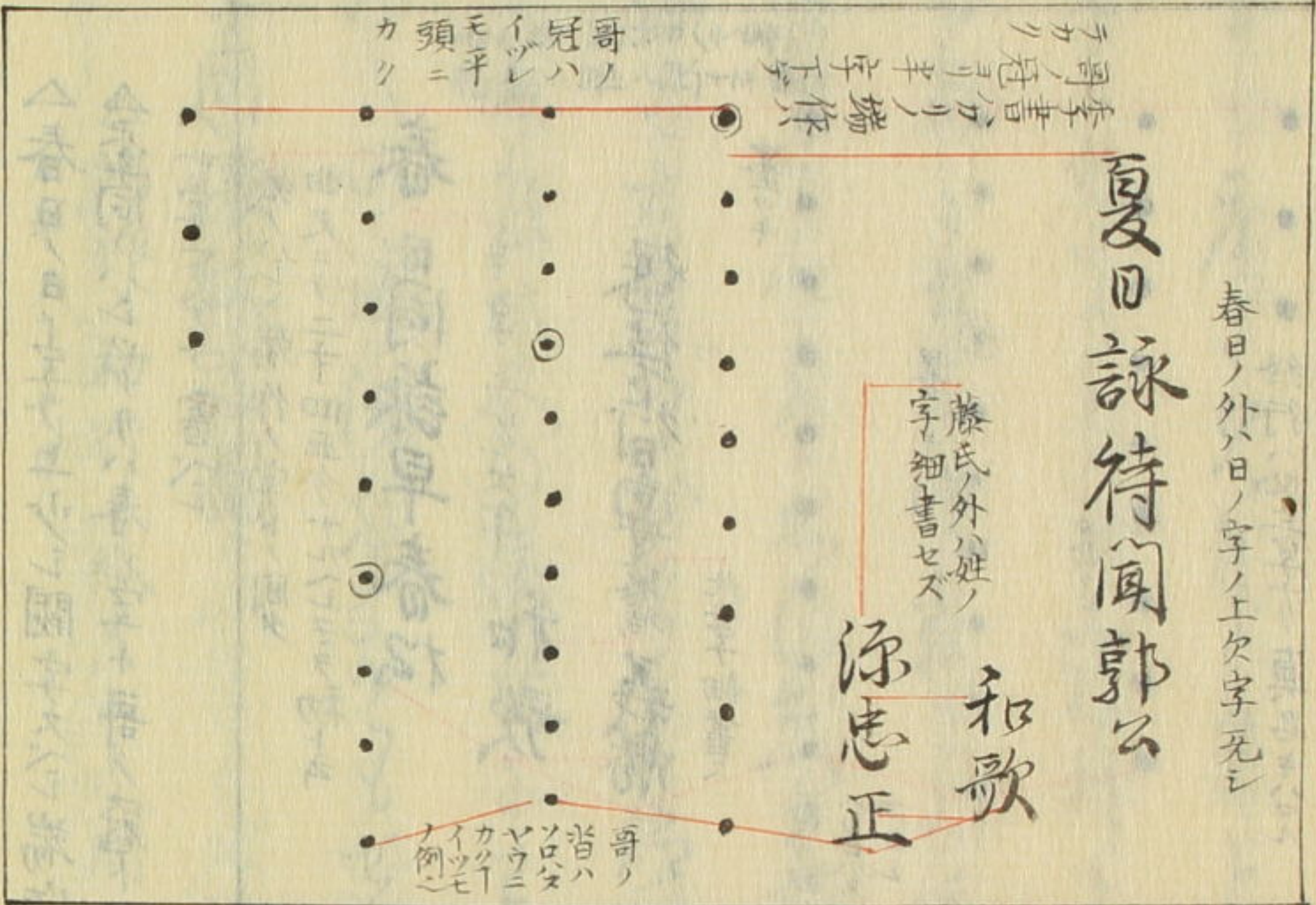
春日ノ外ハ日ノ字ノ上ノ字無ク

夏日詠待聞郭公

藤氏外ハ姓ノ字細書セス

和歌

源忠正



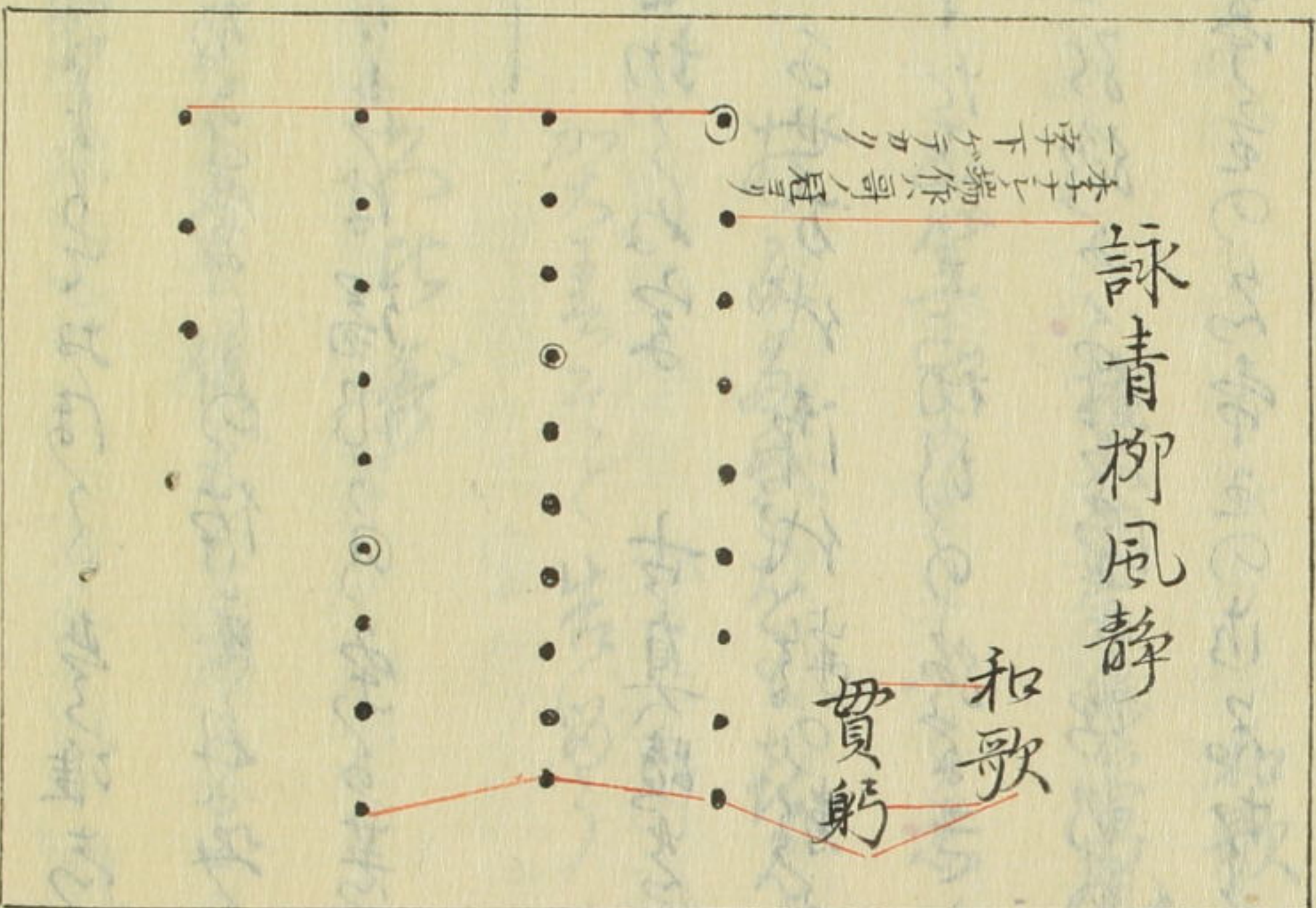
△名書ハ藤原氏ノ人々姓ヲ細書ス
 他ノ源平橋ナドノ姓ハ細書及久

季無懷紙之圖

詠青柳風靜

和歌

賀躬



△季无レノ懷帑ニ姓ヲカス

右の圖よりておぼく、其確多し一傳多足量の懐
此のふらさむくの傳あれみは獨傳り念書此海なる
此をなまは獨傳りの案の甚り一と此圖をえんくは
傳一

○書切ぬ字 古真蹟者懐紙に必書切ぬ文字あ
り君の世万代清代弊の弊を二行のわけり書
た一たを初りの海なきとき初りの首に又とき
初り孫孫のふとき次りの首一世と書きたるは
はう亭主の名帝主の名をわするをば詳く書きぬ
やうも書きぬのふや宣風々記 永正三年正月
十九日の條

春日同詠管知萬春

和歌

権大納言藤原宣胤

二笠のふらふらと

あふあふをのこ

かたもろそと 告め

久比野

ともしんそと傳あなまふらあはふらふら
を傳り

○日月君の字 古草懐紙の日月の字君の字なるを
相ほく字より書く依る字を其の字にさねてその後を
とて終るそのゆゑなり時宜よりその辭約せしむる
也

○加言懐紙の字 加言の懐紙は憂悲涙泣等如
いまりきま字をえしむる其後を改めしむる 古草
懐紙のこれきまなりなりとんぬ

○皆冠 冠の字を冠といひて皆冠といふ冠の字は
ふれりしむるちき皆の字にさねて振りぬるしむる
古体なり冠の字をさねたりたりといふ或る依るを

り動くもわるとんぬる其の字にさねたりたりとんぬる

○異續 異續の字は端仍の春日とちき續と同詠
續て題又ついで係秋の字をこの字に位置書も官
位にみれ馬と書ふ兼行守姓朝臣などの字を異を
はるはる書く動は十二二十七とつてわたりはるか
つきてその目立ぬやうに起る事なかりやう字をさ
あゆり多續目一二字たひひとく其の字を異の字
字ありしむるもあつて時宜よりその字をさ
るるも其の一概の字にさねてはるはる古き其續
の懐紙をさねたりたりとんぬる記るれを余り私に

○奥の明間 奥の明は多く明くぬる所もあつたる

もよるる一の明は、おぼゆる一初は、明くぬる

懐かき体有り場作の明のよる場作の条あり

くりりて、奥の字もほろひの事、懐かしの体

○歌の関字 宜胤卿記 永正四年閏十月一日の条 子自濃

州左衛門督基音 状到来先日返事也有歌

心あはれ 君よりとてぬることせむ

あつてもおぼゆるのよるもいふ

彼状云、歌ニ関字平出事近代不見及、候公宴た

るも無、其候候状但京極黄門建仁元年之度峯月

照松と云題みて、（以下は）

（以下は）

（以下は）

松をうけのあま出はる

とかけまはけ印不見し候、而見奉りしに、度々此歌

黄門自筆懐紙先年於此、金吾許一見了、誠公宴可

故實歎平出まゝを、盛平之事也云と、有

のしあはるまゝつねりふて、（以下は）

よりのふも初りとなり、（以下は）

少は、（以下は）

廿二首懷紙并圖

兼載雜談も二首、三首懷帛ハ二行七字也云々東野
川聞書もも十首も二行七字とんゆ尊俊作法
録も二首の和歌の會紙可認様之事一首は和歌
のこく俗中も春秋とるも季の字或可書也貴人
法中も唯詠二首和歌と書て又一首の懷帛のこ
とく端作もるゆめの題を書いきも後の題一首
或三首の時乃たくくも書くもこきありよの
つねも冬端作も春日同詠三首和哥と書て官位
實名を書き題も端作よりれ二字ばかりけく

書てさそ哥字二行七字も可書也たそた

夏日同詠二首和歌

權中納言藤原朝臣定家

河上月
多影ゆ絲も
くたのこき残とらあへぬあさ
なつらるる月こけ
山家郭多日持
たのたのさるまをさるあそ
ほひまをひらぬ

多よりほくふれ

右のたゞし書志とむづ云今拙子場仍子の
歌の歌ふたは某日詠和歌と古き奥の歌を
あつたを挙たるあり又端作の某日詠某二首和
歌と書を別な題をば挙た歌を二首とて歌にあ
りそれゆゑ古き懐巻に足ゆハ重抄卷の
一切貴賤普通詠何首和歌又始ハ書題和歌とて
其後毎哥書題普通事也とありその因

春日詠二首和歌

此圖の古き古き懐巻をえり
あり藤原の二字ハ前巻名集要
はあり藤原の上の句の始と下の
句は始と二行なり二行七字ハ初句

藤原〇〇

題

題

詠二首倭歌

名集

詠二首

和歌

名集

夏日詠夏雲和歌

源〇〇

みて一行三四の句より十行五の句一行
なり高貴の人来門が夏日春日
あつたに季書もなぐ尸の源平藤橘
あつたにその場作の圖をたよ

夏風

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

おの追悼の懐紙も余所見の古墨蹟これ二首なり  
そのくはきき事追悼懐紙の条より

三首懐紙

三首懐紙を二行七字なりと東野州圖書並載

雑談なるもの尊俊作法目錄に三首懐紙の本号  
も二首の和歌のあり詠三首とあるなり  
又題を何れにありて入付るものも二行七字  
なりとあり思記文龜元年  
十一月廿三日の条より冬日同詠三首和歌権  
大納言藤原宣胤少の三首懐紙を載るは永正四年  
十一月廿三日の条より三首懐紙書様二行七字如例と  
いふ墨痕の三首懐紙の量

端作墨換なり二首懐紙と  
貴人法中の端作も亦同

秋日詠三首和歌  
平名采

春日詠梅始用和歌  
源名采

おのゝ明月記歌道部歌  
住吉 恭 詣の余  
の二行のちのる三首懐

歌

歌

若草

柳風

あり東野洲同書に懐紙を一つづつある詠三首  
和歌とありしけむ官と名乗をさく姓をかばせ  
官を名乗をうたりあるもるんえと必えつせせざ  
はのこ

太上天皇幸住吉社同詠三首應製

和歌

正四位下行某

寄社社

あひおひの飛さきりんもときを  
きんせいのまのまみりの中川

初冬歌

ふゆやくも多むねをぬき  
かきぬきしききあふたの袖

雪松風

あをらしまのせの浪の夕やま  
こゑのきからぬきしき松の傍

以下の二回を 東坡抄写あり  
況みゆき 形も似れぬわ

詠三首和歌

肥前守名乗

歌

歌

歌

春日詠三首和歌

藤原名乗

歌

歌

歌

五首懐紙

兼載雜談の五首七首は懐紙の一紙に二行つゝまゝよ  
 しくして東野州同書に十首ありて二行七首ありて  
 ハヤシ抄抄<sup>二</sup>の五首ありて一枚及十首ありて一續皆用  
 多摺紙<sup>云</sup>にありて尊俊作法目録に五首の懐  
 紙の付る紙を二枚はくありて端は二首の係紙乃  
 ありて二行七首也二首ありて紙を折くの紙二より  
 こけらけを真ありて紙を折るとなりとらん余も愛  
 の古き懐紙ありて二枚に二行七首ありてありて  
 右紙の澁目のよき紙に初めありて三首目の歌を二  
 行書きし後目をこゝろえり紙の七首を古きたりき

五首七首を二枚十首を三枚はきたりて是字續懐紙と

りふ

兼載雜談の一段  
 より二行の書き廻

此圖は分紙の仍りたるなり端紙を貴人書つた  
 こゝのこゝろなりて常の六重ありて此を  
 へきとせり

詠五首和歌

名乗

歌  
 歌  
 歌  
 歌  
 歌

△尊俊作法目録よりて形は仍りて  
 圓小きも福徳を平人と貴人乗  
 門との分別二首懐紙にお紙

秋日詠五首倭歌

姓名乗

歌  
 歌  
 歌  
 歌  
 歌

羊

古き真蹟の懐紙圖

欵

秋詠七首懐紙

姓名果

欵

欵

欵

サメ

欵

欵

欵

④七首懐紙

欵  
欵  
欵  
欵  
欵  
欵  
欵

欵  
欵  
欵  
欵  
欵  
欵  
欵

七首懐紙五首懐紙お年く一紙二行つゝ書  
兼載雜詠凡説なり東照州写あり十首までハ二行七字  
みち見ゆ昔後仍法目錄あり七首の如題七二枚片  
倍きなり是より十首十五首二十首三十首五十首百をよ

二枚目より五首懐紙より一首はあまのり  
 兼載雑談より一首はあまのり  
 つまらぬ一首はあまのり

星夕詠七首和歌  
 姓名兼

歌  
 歌  
 歌  
 歌  
 歌

算校他法目録より一首はあまのり  
 つまらぬ一首はあまのり

詠七首係歌  
 姓名兼

歌  
 歌  
 歌  
 歌  
 歌

等

古き真蹟七首懐紙の圖

歌  
 歌  
 歌  
 歌  
 歌  
 歌

春日詠七首和歌  
 姓名兼

歌  
 歌  
 歌  
 歌  
 歌

歌  
 歌  
 歌  
 歌  
 歌

④ 十首懐紙

|       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 歌     | 歌     | 歌     | 歌     | 歌     | 歌     | 歌     |
| ~~~~~ | ~~~~~ | ~~~~~ | ~~~~~ | ~~~~~ | ~~~~~ | ~~~~~ |

ソキメ

東野州圖書の懐紙を十首ありて二行七字の書十  
 首もなりぬ二行の云々兼載雜談の五首七首の一紙  
 二行つたり十首より上り糸を一つ傍に云々此は説  
 語として一定きん東野州の親を十首懐紙を二行七  
 字なり兼載雜談の五首懐紙以六一紙二行の十首の  
 と記す糸を傍に二紙二行なり尊俊他法目録には  
 七首の和歌も二枚つづきなり是より十首十五首二十首  
 三十首五十首百首ありて一冊他方のなり  
二首懐紙の端  
 他は同きなり 歌  
 名をきて二首三首歌として歌をかき歌を上下の句を  
 おりしとほのれにちりしとて其を余り示えの古人の



真蹟より十首より十五首より二枚より二行より書きたる  
 三枚より二行七字より二種ありいほ目紙の繪目  
 りをよみたる二行幅線より一と草とを紙の二  
 枚より一をよみけるおのより草とを十首十五首二十首

三枚二行七字の圖

二枚二行の圖

春日詠十首和歌

源名乘

歌  
 歌  
 歌

冬百回詠十首和歌

平名乘

歌  
 歌  
 歌  
 歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

羊

羊

歌

歌

歌

歌

歌

歌

羊

是をよみたる草

共十三首十五首廿首卅首五十首百首

千首等の懐紙

十五首より百首までみれ二行より端作る十首  
懐紙の紙おろし紙教を定むとて強目のくまの字を書  
ぬやうな法あり千首より五りくまは定むる十五首以  
上をて巻懐紙といふ懐紙一卷とよぶと十三首  
懐紙ありそを十二枚和歌の懐紙なりいほきもの  
もくあり余るる古き巻懐紙大長巻の紙  
懐紙も紙おろし一六二寸はりたるきよ人の紙  
短くつぎ事な紙もやまを十三首より千首までの

懐紙をよきくまの紙

十三夜懐紙

十五首懐紙

九月十三夜詠十三首和歌

姓名乗

歌  
歌  
歌  
歌  
歌  
歌  
歌  
歌

八月十五夜詠十五首和歌

姓名乗

歌  
歌  
歌  
歌  
歌  
歌  
歌  
歌

二十首懷命

|   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|

モトクサ

百首懷紙

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 | 歌 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|

モトクサ

春日詠二十首和歌

姓名彙

歌

歌

此以下十五首懷紙の順次

三十首懷命

夏詠三十首和歌

姓名彙

歌

已下廿首懷紙の順次

冬日詠百首和歌

姓名彙

春九首

歌

此頃より九首書終て次は夏十五首秋九首冬十五首恋九首雑十首なり書たり未だ例のりて書ゆ

千首懷紙

詠千首和歌

姓名彙

春二百首

歌

五十首懐帝

秋日詠五十首和歌

姓名衆

春十五首

歌

歌

此以子十五首書終次  
夏十首秋十五首冬十首  
わらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわら

衆

以下百首の書くこゝ  
夏百首秋二百  
冬百首春二百  
百首と明くわらわらわら

七 懐紙の料紙

懐帝より高檀帝を用ふは終みちねのりより大  
高小高なるより高檀紙より高檀紙を略す  
いふはたうがみより用ふよりなるなり  
のみ多一名ありたりありたり末帝の時た  
紙より檀紙を色より保るるなり  
とて茶人の茶敷紙と檀紙をのみ用ふ  
た紙の遺風たるなり  
高檀紙今伝はるなり  
わらわらわらわらわらわら

懐帝より高檀帝を用ふは終みちねのりより大  
高小高なるより高檀紙より高檀紙を略す  
いふはたうがみより用ふよりなるなり  
のみ多一名ありたりありたり末帝の時た  
紙より檀紙を色より保るるなり  
とて茶人の茶敷紙と檀紙をのみ用ふ  
た紙の遺風たるなり  
高檀紙今伝はるなり  
わらわらわらわらわらわら

わらわらわらわらわらわら



初学よりけりやとこのころ

季書春日懷紙

春日詠立春風

倭歌

從五位下守彈正源朝臣某

春日同詠梅初開

和歌

從五位下行飛騨守橘朝臣某

春日詠早春松

倭歌

遠江守從五位下某

季書夏日懷紙秋冬亦同

夏日詠首夏朝

倭歌

從五位下行彈正忠平朝臣某

神前法樂懷紙

元日侍 柿本影前同詠

早春梅和歌

從五位下京亮藤原朝臣某

同

重陽侍 住吉社室前同詠菊

和歌

從四位下行日向守藤原朝臣某

△春日の季書より日の字上少し闕字はる

なり但し春日は陽の事と見え夏秋

冬の季書より所見なりしと春日も

も闕字なきもあれは一概にハレハレ

△はる季書の懷紙より丁寧なる義あり

亭主を貴ぶ心なり季書なきは自己よ

り目下の亭主に對せし時のあはれ

く失禮なり風流の意ある失禮なき

△季同をこころ亭主格別の高位秋又も高位

の人同會はる時のわたりなり普通

書る官をばかしく

△亭主と同姓の人を姓を書ぬるなり亭主

源氏ならば源氏の人を姓を書け亭主

平氏ならば平氏の人を姓をかくる事なり

されど今の世はあはれ人も源平藤の

姓を犯しめれば一概にハレハレ

△夏秋冬とも日の字の上闕字はるなり

も姓氏も同く人となりる者くべし平氏

あはれも富士と富士小山田と小山田と別

亭主も富士よみ人も富士なりはる者くべし

亭主小山田よみ人も富士なりはる者くべし

△神樂法樂の懷紙は季同位署書あり神

号の上を闕字はる又題一行はるはる時

次の行の和歌の上はる但し二字以上はるは

次はる行はるはるはる書け一字ハレハレ

△藤原氏のかきりて姓を細書はるなり

源平そのの他の姓の人を細書はるはる何の

懷紙はるはる此定なり

凡人の懐紙

春日詠梅花

和歌

藤原某

同

春日詠若草

和歌

源某

凡人袖集法樂の懐紙

重陽侍 某前同詠

菊花盛和歌

橋某

同

春日詠青柳

和歌

平某

凡人亭主同姓の時の懐紙

星夕詠萩風

和歌

某

官僧懐紙

詠若菜和時

和歌

権僧正某

同

詠

和歌

法印某

凡僧懐紙

詠依梅侍風

和歌

沙門某

法中々僧正僧都律師法印法眼法橋の歌  
少々官ある僧を官を書ぶ一官を  
書たり季同ハ必ク心となり醫家画家な  
どの歌も亦同

同

詠

和歌

法橋某

同

詠

和歌

沙門某

同

詠

和歌

某

児童の懐帋

詠

倭歌

某九

醫師画師同朋の懐紙

詠

和歌

名乗

児童の懐紙も季同書なるともなく姓氏も書ぬともなり凡僧の懐帋もおなじく名書を某九と書

醫師画師などの懐帋ハ無官無位と名乗をう書こ官位ある官僧の例もある同朋も名乗はかりなりといれも季書をた。古真蹟これさやうなり

致仕の人の懐紙

春日詠梅花

和歌

後位下平朝臣某

神社佛寺及山水遊覽の時の懐帋

冬日於某所詠夕雪

和歌

河内守某

神社佛寺及勝地名所遊覽の時は闕字位署書は不及季同書をたぶら官位ある人名官と名乗凡人も名乗さうなり

致仕して官を辞する人の官を名書位の書こなり端作をたてておなじとたれども官名を書け位の書こ古き真蹟の例なり

神社の於字の下闕字は

替於某社同詠

和歌

右近将監某

同



佛者ハ欠字ナ

夏目於某寺詠

和歌

某

臨時懷命

於某山觀梅花

倭歌

左少弁某

夏目於某山庄同詠初閱

郭鳥和歌

某

同

春日陪某侯書閣同詠

和歌

能登守某

同庚申夜

秋夜守庚申詠

和歌

某

同錢某

饒奥州橋使好官

和歌

某

臨時懷命

涅槃會日遊某寺詠

和歌

平某

同

西行上人言詠

和歌

源某

臨時懷命

灌佛日詠

和歌

藤原某

臨時ニ端作をほくらりて書とあり  
此より出せる体も唯々て仍る

同

定家卿忌日詠

和歌

楊某

貴人より下輩の亭主は賜ふ懐紙

詠梅筆用

和歌

名乗

書捨懐紙

書捨とりふ  
る略裁なり

貴人下輩へ

たすふ時又

折はよりて

當坐かると

書ても有

とんゆ

題

名乗

同

春雪

名乗

花兄よりあり

名乗

高位官の人下輩は亭主たる書捨紙  
を季同じ位署もなく名乗たり書らる  
るゆきと梅の高位の人のおと  
とんえの位署は位なよ人のさ  
まのつわりの大後のはまの  
あつん人さるるまふはき  
やまの柿が影供なり貴人さるる  
季同位署を書らるるえんたり  
主る早くと折本神前への礼なりとぞ  
同くとの懐紙

○春日 楊柳下。春日と書時春日の字は上らぬ。一箇

字せしむる古き懐紙におほしたる。歌なきとんえたれ  
むかへたるなむつのは。夏日秋日冬日なり。一箇字せ  
しむる。またんゆ。春日夏日なり。季の書捨紙なり。と  
んえ。高下を重し。とんえ。とんえ。

○同詠 季書のみ。同詠と書る。たすふ親王棋

家なるといひつる。きやむとわ。親王前。おとんえ。外お  
なごの事とんゆ。とんえ。月記。愚記。なるとんえ。おとん  
記録。とんゆ。おとんえ。とんえ。とんえ。とんえ。とんえ。

○題割書 端仍り長き時。是。題。此。字。成。し。ら。る。二。行。な



以契も今も一族の同姓より記取つてやたしとせむ  
ト平氏もとも小山田と島山ハ称号おたねの省の  
む小山田とむ山田とむ一族一苗かねの省ら成  
信ふしと一苗字の人ともわ省くとも宅むびきの  
とや言塵集七の子尚所代足利将軍也とむ源氏の人を姓  
氏を略しとなく官位と実名をうりて書たりは正  
法同姓をともゆ志におく色中とともおたねの御  
院を種々懐紙おとむとさとのあはれと一はを能  
とらふ會たりともおたねの御院とありて書たりと  
とらふと人のおとせ世を姓なき人のことおもひたりゆ

き中とむ法同姓の人おきりてとむとむといふゆと死  
あきたる

○凡人懐紙 凡人の懐紙を姓名のみとすたを  
源某平某など書たり藤原氏を姓を細書し名を  
字をくみき以ホカ外む姓も名を太く書也

○姓の細書と太書 今の人懐紙は姓名を書たり  
たりと姓を細書しと名を太く書たりとむとむとむ  
は記のそたり姓の字を細書たりと藤原氏の末家  
新宅たりともおたねの人の書極あがはさるゝ為なり  
本家とも極政家をおくとも未だの自餘の藤氏のもの

形をさるる源平そのあは姓の人を藤原氏の私の  
書様をたしひきおくらひてりものごとく水色本家  
末家の書法伊勢氏貞の二上峰を足申

○僧の懐紙 僧の懐紙を季同おとをきく詠某

和歌と書き凡僧なまは名をり書き或ハ沙門某

沙弥某なり書きなり桑門とは大長以上の入法体の

書より了後懐紙或といへる官僧を大僧正某法印某

法眼某法橋某権大僧都某なり書きる書蹟おほり

ハ書抄二の巻子僧を唯一官なり法印和尚位なり

不可書凡僧多只名をり又沙弥ハ或る可書ともて

ゆめさ仙慶行者の懐紙ありゆめさなり

吉祥寺三十一

詠 歳暮并無常和禱

依競寸陰弥迷経慮仍以一首

在言展二題之奥首且為

且為恥矣

昔ハ雲末流今三密行者仙慶

かきまをりかきまをりの

まきまをりまきまをりの

わりけり

年月ハ後人の書入也

歳の字を阙字に

○児懐紙 児童の懐紙を季同なり書き名を某也

と書事なり了後懐紙式は兒のこよみを名を  
たの丸とありて端は男と有り多ぶしとい契り北  
院御室守覺法親王の右記は兒懐紙者一涯可存美麗者  
也無風流直檀紙用之無下覺侍下繪檀紙并薄檀  
紙等其外色紙盡表事不可有究期とんて下法を  
たの檀紙を厚檀紙とて色紙を用ふと古き例なり  
○致仕の人の懐紙 致仕とて官を辭したる人の  
懐紙は歸郷の例はかけなく位署書も官をこの例  
多しとて後四位下藤系朝臣某後五位下平朝臣某など  
ゆき書わり了後懐紙式は前官の人の散位と書く例

實なりといへり

○遊覽の懐紙 神社佛寺及勝地名所等遊覽の  
時端作を於某處詠某と書つきよハ雲沔抄卷二の  
見ぬすこ夏日遊某所詠某和詠秋日遊某山庄詠  
和歌なりとて位署もなく官と名乗計り書くは  
無友無人とも乗れみなく姓を書ぬとて古  
真蹟これ志ありけり神社の懐紙は神社のらむ  
久きあり佛寺は國字なり於の字起のまゆれ  
時字は依り

○臨時懐紙 臨時に題字は終るあり庚申書

錢別本の端作のナリは出乃

○一首懐紙 一首懐紙の端作はハハキニ行也

春日詠集と云ふ次の初と和歌と書ふ季書のを

字よかりしはみれこの定なりと云え古き蹟み

な一り

○二首以上の懐紙 二首以上の懐紙の端作を

と題一行なり詠二首和歌詠三首和歌詠と一行

の書しはたより不確懐紙本は詠の字をばより一

寸二分をとりさけて書しむり詠の字と二首三

首をとりしをば一闕字ありき當世を闕字あり

このはとらるり

○季同 季同といふは春日同詠夏日同詠など書

事なり此の時端作乃題と詠の語も高低な

れよま書しものと云え古き蹟はあり季同字あ

る極ふの言をばたうこのありき書しむり

○季書 季書といふは春日詠秋日詠など同

詠字を省むなりは端作を詠の語よりわきぎて

書しむり古真蹟の何なりさる古き高蹟は春日夏

日秋日冬日などありよる元日二月三日四月

日七夕星夕秋秋重陽重九晚秋歳暮など書しむ

ありけりは子日入日上巳端午中元八朔冬至庚申  
夜なごもさきこらわらなり季書を禮儀なり  
敬なりき貴の亭主のりりて書つて同樂以ての會  
も多きまねもつゆさね亭主を賞歎さるるが凡  
乃為すれが今の世もて多きもさりなん十五  
秋なごの會を亭主よからけり後月をたて  
福とさるるつゆをたねゆ

○端作書初 端作の書きとてめる古き真蹟の例  
おほくは檀紙のりより曲入りて寸四ふたなり  
余りえあつたる懐紙二寸二三分より六七分ふた

ありて一宅を以てさきと二寸四ふたなりがいは  
ほりて懐紙紙式ある袖をよおおく厚とれき  
書なりとては袖とは端の間の事二首の端  
仍もみれこの定なり二水記 大永五年 三月の条 あり高サ一尺三寸  
二分端作ハ三寸五分計とていひたれそ六臨時のり  
まもまおひひり

袖間二寸四五分ナルニ  
春日部  
和歌

○端作文字 端作を墨書ふこのく季書とてはき同



詠みそつぎ懸まほお和歌のそほくとなり續懐紙  
あ詠みそつぎ何首のそほき和歌のそつゝ位置を  
を官位にこれ懸まほまき兼行守姓朝臣おれ家  
書をほくがまきなりゆいこつほきとて同り  
まぬやういふことはい川まの字のそほく

○倭和歌哥詠等の字  
たつほくは倭歌倭哥倭  
詠和歌和哥和詠なと書くる真蹟いとおほく古  
今弟雅抄序本序注に和を倭の字と音通はぬ  
より正義を倭を書つきなりとまる歌とを和用  
に風なれ和歌といふ歌の字哥歌の二字おれ

正まを歌たり定家卿自筆の懐紙に詠の字を書  
きたるこゝ徹書記物語に和歌の哥の字紙も中は二  
條あり歌の字紙もき冷泉家も詠の字紙書と  
中作に別ははうあかしくいふべきもあはれ  
のつゝ法をたぬる歌の字をかき冷泉家も  
詠の字紙書紙にをこのやうに中けるわたり人篇を  
倭の字和とおたりそわうさりぬらなるめ  
をあたらし人あはれはるる詠のよきとて言塵  
集七のに和歌といふ字も為世方のそ必歌け字を  
被用之為相才のそ詠を通用之也定家卿懐

紙をさしつゝ勅撰の和歌の字を皆此哥とて爲  
世のののの後なり但後南太の自草の千載集みは  
哥廿字字様ありなりなとてとてい川まよあて九  
あかぬとてとての  
九經字様の欠部  
歌詞二同詠也

○端作闕字 端作の闕字を應製禁裏仙洞の仰也應

令皇后東宮かの仰也親王  
内親王の仰也應命親王内親王法  
親王なる仰也應教撰政闕自將軍家  
なる仰也

たると應の字も闕字なるもとよりとて春日の  
日の字の上侍中殿などの侍の字は下など必闕字に

春。侍。中殿同詠、  
應。製和歌

參議後任近衛權將藤朝基上

印の所少く欠字なるは  
端作たる名乗の下上  
の字を

よと神前の懐紙も柿本影前聖廟影前なるの紙柿の  
字聖の字紙欠字は併図を欠字なり

秋日侍 住吉社宝前同詠  
和歌

冬日遊長樂寺同詠  
和歌

○未公文勅公文 未公文といふは國司四年の任

をさしつゝありたるが未その國の勅字は皆漏せざるを  
いふ勅公文は任限の中悉年貢の勅字漸くを  
しつゝ未公文の前目を  
前目、前の  
國司の義 受領たるを勅公文を

前司を位をうり書たりたると未公文を前信濃守後  
五位下平朝臣某勅公文を散位後五位下平朝臣某なりと云

○二字題三字題 多同なりと云 詠梅花和歌詠菊

始関和歌なりと云の短き楊花を一行にまゝと云る古  
体なり室町の末ははより和歌字法の初にまゝと云  
通なるはと云る由次の行の引下と云ゆ急ぎのと  
和歌のまゝと云るあきと云るゆるなり

古体

同上

詠——和歌

詠——和歌

中昔より後の体

同上

詠——

和歌

詠——

和歌

○名乗 名乗を端作の和歌の字と歌の初たりとの

真中よ和歌の字より半字さけく書きたるは古高漬

すおほりり宣胤卿記 文龜二年正月廿五日の條 あま名乗、歌よりかじ

はの終つと云んぬ官位姓をその上と云るとは、實名

の書ふまを定こちつ

名乗の上の字和哥の和の字より半字  
下り下の字を歌の字より半字下  
あかり

春日詠

和歌

名乗

○經文端作 車野州同書り經文の時の端作のやう

李日聽講法華經同詠

不輕品和歌

名乗

とあり余の兄古真蹟より詠法華經序品和歌  
詠藥草諭品和歌春日同詠安樂行品和歌など書り  
しき和歌の二字多しづきもふりある一初めあり  
は

○ゆゑ草とりつる二初書十首以上の憶序あり  
そつら花軸の紙の下の句を別行のさけこのを

ととなりそる

きりりりなやまのたつら

いりりりかき

いりりりのゆき

かやうなまゝの一句をふりてとたり古き  
憶序あり十首以上百そりて及ぬものもわらう十首  
も同様あり

○當官前官 言塵集<sup>七の</sup>卷<sup>七の</sup>前官其人を前某

まゝ然るははらう如く四位五位の人をも前官り奉  
たふは教位某と書りて云當友の初をそ官を

書く姓と実名とをあらわし先官の如きは位と實  
名と書くよりよきなり或は從五位下も從五位上も從四  
位下ももも位下も隨之と凡ゆる未公文勅  
公文なるも似たりと云ふ

作歌故實卷之一終

